

## 米国における向社会的行動の分類学的研究

### (1) 向社会的行動の類型

高 木 修

A Taxonomical Study of Prosocial Behavior in the United States of America

### (1) The Cluster Structure of Prosocial Behavior

Osamu Takagi

#### Abstract

Pre-theoretical taxonomical research is essential to the planning of research design, understanding of results and formulation of theory. In accord with these notions, a series of taxonomical research projects have been carried out in Japan. As prosocial behavior is thought to be prescribed by social norms, the taxonomical study was done in the United States of America using a cross-cultural approach.

In this article, cluster structures of prosocial behavior which were clarified through the same technique as the research in Japan are reported. "CAPS" in the UNC facilitated the collection of prototypical types of helping behavior and the estimation of similarity between the types of behavior. In order to elucidate the structure of prosocial behavior, cluster analysis was applied to the data-matrix.

Several cultural differences were found only in types of behavior which go together to make up the structure of the cluster. Future taxonomical research is proposed in order to make clear the behavioral characteristics, normative attitudes and motives for helping/not-helping.

Key words : prosocial behavior, helping behavior, taxonomy, behavioral pattern, cross-cultural research, norm

#### 抄 録

研究の計画, 研究結果の解釈, および理論の構成にとって前理論的な分類学的研究が重要である。一連の研究がその視点から日本において行われてきたが, 研究対象の向社会的行動が社会的規範などを通じて文化に規定されると考えられるため, 比較文化的な観点から, その分類学的研究が米国において行われた。

この論文では, 日本における研究と同様の方法で解明された向社会的行動のクラスター構造が報告される。「キャップス」(CAPS)と呼ばれるデータ収集施設を利用して典型的な向社会的行動の収集および行動間の類似度評定が行われた。このデータにクラスター分析が適用され, 行動の類型構造が明らかにされた。

基本的な構造の差異は両国間で認められなかったが, 各クラスターを構成する行動の水準で幾らかの違いは存在した。クラスターの特徴や構造の文化差の原因を明らかにするために, 行動特性, 規範的態度, および行動動機の視点からの分類学的研究が提案された。

キーワード : 向社会的行動, 援助行動, 分類学, 行動類型, 比較文化的研究, 規範

目 次

1. 向社会的行動への分類学的接近
  2. 向社会的行動に及ぼす文化の影響
    - 1) 向社会的行動に関連する文化
    - 2) 規範の起源, 伝達, 淘汰: 文化的進化 (cultural evolution)
  3. 比較文化的関心からなされた向社会的行動の分類学的研究
    - 1) 比較文化的な研究関心
    - 2) 日本の研究と比較する研究の対象国
      - (1) UNCチャペルヒル校の特徴
      - (2) 「キャップス」(CAPS)と呼ばれる実験的なデータ収集施設
    - 3) 典型的な向社会行動(援助行動)の収集
    - 4) 向社会的行動の類型化
    - 5) 日本における向社会的行動の類型構造との比較
  4. 比較文化的関心から今後期待される向社会的行動の分類学的研究
- 参考文献

1. 向社会的行動への分類学的接近

向社会的行動 (prosocial behavior) への分類学的接近の必要性は, 向社会的行動をも含む社会的行動一般に関する従来の社会心理学的研究への反省の中に確認することができる (Pearce et al., 1983)。Pearce らは, 社会心理学の研究に認められる3つの弱点としてそれを表現している。すなわち, 第1に, たとえ同じ行動に着目していても, 各研究が焦点を当てる行動の側面は異なることが多い。したがって, それらの研究の知見を相互に比較して, 一致するところと異なるところを研究間で整理し, 研究知見を統合しようとしてもそれが難しい。つまり, 研究の数は多いが, それらは個々バラバラであり, 研究成果を関係づけて将来の研究に役立てることが困難である。第2の弱点は, 第1のものに関連しており, その結果とも考えられる。つまり, 第1のような事情から, 研究の知見が一貫せず, 対立することがよくある。第3に, 研究知見を一般化し, 一層包括的な理論を構築するためには研究の範囲・限界や研究環境が明細化されていなければならないが, そうでない場合の方が多い。このような状況に対して, Pearce らは, 生物学や植物学などの自然科学の研究に習い, これらの弱点を克服することのできる1つの方法として, 具体的な研究に先駆けて行う, 「分類学的, 構造論的接近法による前理論的な行動研究」を提案した。

この Pearce ら以外にも, いく人かの研究者が向社会的行動それ自身やその行動の生起する状況の分類・整理が研究のために必要だと指摘している。例えば, Wispe (1972) は, 色々な形で現れるポジティブな社会的行動の間の類似点と相違点を明確に定義することによって, 研究における一層正確な変数操作が可能になるとし, その形の行動を, 愛他心, 同情, 協力, 援助, 扶

助、および寄付の5つのカテゴリーに分けている。また、Staub (1979) は、行動の理解や予測にとって、行動目標も重要だが、それよりもむしろ目標を活性化する状況の特徴に一層注目すべきだとし、9つの状況特性、すなわち、援助状況の曖昧性、援助の必要性、援助責任の集中性、状況刺激の扇動性、自発的援助の必要性、援助の出費、援助の社会的容認の明瞭性、援助者と被援助者の関係、および潜在的援助者の心理状態を挙げて、どのようなときに援助行動が起こり易いかを仮説している。さらに、Amato & Pearce (1983) は、研究者による常識的、恣意的な行動のカテゴリー化ではなく、客観的な手続きによって経験的に行動を類型化することを試みている。彼らは、雑誌に掲載された研究で取り扱われた62種類の援助エピソードから出発し、多次元尺度法と重回帰分析などによって、衝動的で形式ばらない援助かそれとも計画的で形式的な援助かを区別する次元、重大な援助かそれとも重大でない援助かを区別する次元、および直接的な行動援助かそれとも間接的な物質的援助かを区別する次元の3次元から構成される援助行動の潜在構造を明らかにしている（詳しくは、高木、1987a を参照のこと）。

ところで、高木 (1982, 1983, 1987a, 1987c, 1991) は、以上の研究者と同様の考えのもとで、向社会的行動の分類学的研究を行い、そこから導出される分類スキーマによって、その効用として以下のことが容易になったり、可能になると提案している。すなわち、①この分類スキーマによれば、各研究が問題にしている種々の形の行動は、どこが異なり、どこが同じかが明らかとなる。それゆえに、種々の研究を正確に比較することが可能となる。②分類スキーマに従えば、研究のために選ばれた変数（例えば、援助コストとか状況の緊急性など）に関してその程度を異にする行動を的確に選択することができる。それゆえに、組織的にその変数を操作することが可能となり、一層厳密に変数の効果を研究することができる。③研究で取り扱われた行動のスキーマ上の特性が手がかりとなって、研究結果の考察が、すなわち、仮説の検証を判断したり、そこから理論を導き出すことが容易になる。④研究間で発見された知見の矛盾を、研究で取り扱われた行動のスキーマ上の特徴の相違の観点から解決することが可能となる。⑤研究で問題となった行動に、スキーマ上の特性から限界を設定して、研究知見の一般化可能性の範囲と、理論の包括性の程度を明確にすることが可能となる。

以上の効用を期待して高木が行ってきた向社会的行動に関する一連の分類学的研究は、2つのステップに分かれる。第1は、向社会的行動の類型化研究であり、第2は、類型分けされた行動を特徴づける研究である。前者の行動類型化研究は、さらに、①各行動が持つ多くの特性を基に、それらを総合した、全体的な類型化を試みる研究と、②ある研究目的に沿って、特定の特性に焦点を当てて、その観点から類型化を行う研究との2つに分かれる。一方、後者の行動特徴化研究は、さらに、何によって特徴づけるかで、すなわち、①行動それ自身の特徴による場合、②行動の動機による場合、③行動に関連する規範（規範的態度）による場合、との3つに分けられる（詳しくは、高木、1987a, 1987c, 1991 を参照のこと）。

## 2. 向社会的行動に及ぼす文化の影響

人間の社会的行動は文化の影響を受けている。行動の生来的、本能的規定を主張する非常に熱心な社会生物学者でさえも、文化の影響を認識している。我々は、自己が生物学的進化の産物であるとともに、自己のライフ・スパンの中で継起する出来事を経験して文化的に進化していく存在でもあることを認めねばならない。

### 1) 向社会的行動に関連する文化

向社会的行動に関連した文化の最も重要な側面は、社会的に適切な行動を指示する標準（規範、価値、規則、慣習、道徳的な言い伝えや命令など）を文化が人々に提供することである。その中でも社会心理学者が最も注目してきた標準は、規範（norm）である。多くの研究者が今までに、規範と規範に関係ありそうな概念、例えば、法律、規則、価値との区別を試みてきたが、規範の定義はいまだ曖昧なままである。しかし、Homans (1961) の次の定義は、多くの研究者によって採用されている。すなわち、規範とは、「必ずしも全員である必要はないが、集団の多くの成員たちが行うステートメントのことであり、それは、このような環境においてはこのような仕方で行動すべきであると成員に指示を与えるもの」である（40頁）。

規範は、このように命令的なステートメントであり、何が奨励されているかを人々に指し示すものである。したがって、この規範的標準と規範的行動とは、多くの場合、よく対応している。しかし、その対応は、必ずしも両者の間の因果関係を意味しない。例えば、かつて自分を助けてくれた人を助けるべきであると奨励する規範を認識している人は、他者の援助に返済しようとするだろう。しかし、逆に、援助に返礼している人の中には、この規範の指示以外の理由で、それを行っている人もいるだろう。したがって、行動が規範的なステートメントに対応しているという理由だけで、その行動が規範に導かれていると考えるべきではない。

さて、この規範を取り扱った研究は、向社会的行動に関するものが比較的多い。その理由について、Campbell (1978) は、次のように言っている。

人間は本来、臆病で、嘘をついたり盗みをしたり、食欲に振舞ったりする存在であると考えられているが、その人間に勤勉で、質素で、自己の義務を果たし、集団に忠誠を尽くさせるために、社会はそれを指示・命令する規範や価値を発展させている。ところで、向社会的行動は、「他者の身体的・心理的幸福のことを配慮し、ある程度の出費を覚悟して、自由意志から、他者に恩恵を施すために行う行動」（高木，1987a）であり、これは規範や価値によって育成・促進することを、社会によって強く期待されている。このような事情から、社会心理学者は、規範が向社会的行動の生起に及ぼす影響を盛んに研究してきたのであろう。

## 2) 規範の起源, 伝達, 淘汰: 文化的進化 (cultural evolution)

向社会的行動に影響を及ぼす規範は、主として次の3つの観点から研究されてきた。すなわち、第1に、規範は、ある文化の中でどのように出現するのか。すなわち、何がある命令的ステートメントを社会の中に広く行き渡らせ、あるいは、あるステートメントを廃れさせるのか。第2に、規範は、どのような仕方で行動に影響を与えるのか。すなわち、外的統制として、それとも、内的標準として、あるいは、その両方として、行動をコントロールするのか。第3に、規範は、どのようにしてある状況の中で活性化されるのか。すなわち、何が原因で、ある人は、自分の行動を、別の規範ではなく、ある特定の規範に合わせようとするのか。

向社会的行動の類型化を試みるこの研究において特に検討しておくべき問題は、第1のもの、すなわち、規範がいかにして発生し、伝達されるかということであろう。そこで、この問題についてさらに詳しく検討してみよう。

規範が生じ、存続し、次世代に伝達される文化的進化の過程は、今のところあまりはっきりと解明されていない。規範の起源に関する大部分の説明は、人間性についての原罪モデル、功利主義者や機能主義者の仮定に基づいている。すなわち、互惠 (reciprocity) 規範は、社会的関係を安定化し、強者による弱者の搾取を抑制することに役立つ (Gouldner, 1960)。また、衡平 (equity) 規範は、人間の自然の傾向である「他者を犠牲にして自己の利得を最大にしようとする」を防止し、全成員が恩恵を受けられるように資源を分配することを保証する (Walster, Walster & Berscheid, 1978)。

このような考えは、生物学的進化における集団淘汰 (group selection) の考えに匹敵する。規範が淘汰されるメカニズムは明確にされていないが、Campbell (1978) の文化的進化の記述は示唆に富んでいる。すなわち、社会的進化は、生物学的進化と同じ原理、つまり「理解困難な変異 (blind variation) と組織的淘汰の保存 (systematic selective retention)」に従って進展するが、生物学的進化は遺伝子に影響するのに対して、社会的進化は、体系化された信念、道徳的規範、社会的規則に作用する。変異は、偶然に、あるいは、例えば、法規則の改訂に伴って知的に生起し、他方、組織的保持は、種々の方法による社会化を通じて起こるとする。

ところで、新しい規範が永続するかどうかは、誰が、何をもって、どのような過程で決定するのだろうか。Campbell (1978) によると、淘汰は社会システムのレベルで起こるという。すなわち、規範は、それが規範を支持している集団の適応をどの程度促進させることができるかという能力の点から淘汰されるとしている。そして、個人は、規範が永続するための規範の適応性に気づいている必要はないという。

生物学的な志向性を持ついく人かの理論家 (Alexander, 1979; Durham, 1979) は、規範が集団の水準で淘汰されるという Campbell の意見に異議を唱えている。すなわち、規範は、それが集団に対してどの程度の恩恵を与えるかによって淘汰されるのではなく、規範が個人の全体的な遺伝的適合にどの程度寄与するかによって淘汰されるとしている。

Durham (1979) は、規範が淘汰される過程を記述する中で、次のことを示唆している。すなわち、人間には4つの「淘汰バイアス」(selective biases)が存在し、生物学的恩恵を生じる文化的革新を人々が内在化するかどうか、あるいはそれに同調するかどうかの原因にそれがなるとしている。その4つのバイアスとは次のものである。すなわち、①子供たちは、「自分たちのためになる」社会的規範や伝統にのみ同調する能力を、学習を通じて獲得する。②自己を強化してくれる、あるいは自己に満足を与えてくれる伝統に同調する傾向が、我々には生物学的に備わっている。③大脳の身体的進化に原因するところの「予め準備されている学習」(prepared learning)に向かう傾向がある。④親は、子供たちに文化的教訓を伝え、それによって、子供たちが「益々頭を使わない」(more little heads)でいように生物学的に適応することを促す傾向がある(Cloak, 1977を参照)。

個人水準での文化的進化が集団にとって有害な特性を持ちうるかという疑問に対して、Durham は、次のように仮説している。すなわち、個人の幸福は、彼らが成員である集団の幸福に依存している。そのため、個人にとって最高の生物学的関心は、「非常に利己的な個人の行動に影響を与える規範、規則、文化的統制を受け入れることである」としている。同様に、Alexander は、生物学的進化は、個人が文化に同調するという傾向を育成し、また、個人の利益とならない文化的革新に抵抗することを促すと考えている。

文化的進化の問題は、向社会的行動の理解にとって不可欠である。なぜならば、どの規範が進化し、それゆえに、どのような影響が文化を通じて個人に及ぶのかを推論するための手掛りをそれが提供するからである。Campbell の「原罪」モデルでは、規範の機能は、生物学的な基礎を持つ利己主義を妨げ、それを中和することである。したがって、規範の指示は、本質的に向社会的であると見られている。これとは対照的に、Durham や Alexander のモデルでは、文化的進化の究極の決定因は、生物学的適応である。したがって、向社会的行動や攻撃的行動と彼らのモデルとの係わりは、生物学的進化のそれらと類似している。すなわち、協調性や互恵性や近親者への愛他性を勧める規範や、外集団の成員への攻撃を勧める規範は、優勢で広く行き渡っているはずであるが、非血縁者への自己犠牲的な愛他主義を勧める規範は、高度に特殊化されたコミュニティにおいてのみ進化するはずである。研究事実も、向社会的行動も反社会的行動も、生物学的基礎を持つ傾性と文化的基礎を持つ傾性の両方から影響を受けているという適応モデルの支持に傾いている。

### 3. 比較文化的関心からなされた向社会的行動の分類学的研究

#### 1) 比較文化的な研究関心

文化は、以上のように、その重要な1つの側面としての規範を通じて、その社会に住んでいる人々の行動に影響を与えている。したがって、もし文化の内容が異なれば、その社会での優勢な

規範は異なることが多く、その結果、規範が推奨する行動も文化間で違ってくることになるだろう。例えば、向社会的行動の場合、それに関する規範がもし文化間で多少なりとも異なるならば、その社会の中で規範に指示されて頻繁に生起する向社会的と考えられる行動のタイプも、行動の特徴の評価も、また、その行動の原因となる動機も異なるであろう。

ところで、高木（1982, 1983, 1984, 1987a, 1987b, 1987c, 1991）は、日本における向社会的行動の分類学的研究を行い、向社会的行動の類型、援助規範態度と援助動機の構造、および、それらの間の関連性について明らかにしてきた。しかし、それらが日本文化特有のものなのか、それとも通文化的なものなのかは、それらの研究だけでは判断できない。そこで、日本と文化を異にする諸外国において、日本での研究と同じ方法論（日本語の質問紙をただ単に外国語訳して用いるのではない）に基づいて分類学的研究を行い、それらの結果を日本のそれと比較すれば、文化に共通する、あるいは特定の文化に特有な向社会的行動の類型、援助規範態度、および、援助動機の構造を究明することができるだろう。そのような比較文化的な研究を通じて、向社会的行動に及ぼす文化の影響が一層明らかになると期待できる。

## 2) 日本の研究と比較する研究の対象国

日本と比較する国として、この研究では、アメリカ合衆国が選ばれた。そして、データ収集の便宜の点などから、著者が在外研究の拠点としていたアメリカ南東部にあるノースカロライナ州立大学チャペルヒル校（UNC: University of North Carolina at Chapel Hill）の学部学生を対象者にして、研究が行なわれた。そして、同校が開発した新しいデータ収集施設「キャップス」(CAPS: Computer Administered Panel Survey)を利用すれば、一連の研究のデータが同一対象者から容易に収集できるのである。

### (1) UNC チャペルヒル校の特徴

チャペルヒル校は、UNC を構成する16校の中の1つであり、その中心校として1795年に設立されたアメリカ最古の州立大学である。この研究が行われた当時（1987年から1988年）、この大学は、人文学系の6学部と健康・衛生学系の5学部から成る総合大学であり、教授陣、学生の質、カリキュラム、および諸施設・設備などの点から、全国の大学の中でも非常に高く評価されていた。

設立時の大学は、2人の教授と41人の学生で授業を始めたが、当時は、1,900人を越える常勤のスタッフを擁していた。学生としては、ノースカロライナ州出身の22,781人、他の州出身の50人、そして、外国からの71人がいた。この内の、67%は学部学生、26%は大学院生、そして、7%は専門職業養成コースの学生であった。女性が男性よりもやや多く、その比率は、57%対43%となっていた。ところで、1986年度の新入生の学力水準を見ると、進学適性検査の平均は、1,087点であり、高校時代の成績が各学級の上位20%に入っていた学生が、入学者の86%を占めていた。

(2) 「キャプス」(CAPS) と呼ばれる実験的なデータ収集施設

CAPS は、UNC の付属機関である「社会科学研究所」(IRSS: The Institute for Research in Social Science) が1983年から1984年にかけて開発した研究施設である。この CAPS は、研究者の手持ちデータの保存と分析の可能性とを補って完全なものにするために、調査実施のコンピュータ化と縦断的調査の利点を兼備している。この大規模なデータ収集施設を利用すれば、研究者は、回答者を獲得する、面接を実施する、資料を保存するといったことに、お金や努力をあまり注ぐことなく、効率よくデータを収集することができる。

学部学生の母集団を代表する96名のサンプルは、週に1時間半、学期中の20週の間、コンピュータの端末に提示された質問に回答したり、実験課題を完成したりすることを求められる。彼らは、1つのセッションが終わる度に、4\$の基準賃金と、平均2\$の報償金の支払いを受け、そして、学期の終わりにはかなりのボーナスを受け取った。

研究者が調査を実施するのに参考になるだろうと、施設のスタッフは、400を越える研究のプログラムモジュールを用意している。したがって、このシステムを利用すれば、研究者は、非常に容易にデータを収集することができる。彼らがしなければならないことは、回答者に提示することと回答者から得ることについて詳しい情報をスタッフに提供することだけである。

CAPS は、種々の学問領域の研究者によって利用されてきた。例えば、経済学者は、不確実性のある状況における意思決定についてのデータを収集した。精神分析学者は、家族生活とその中での葛藤について深層面接を行った。政治学者は、選挙期間中の投票意図の形成過程を明らかにした。文化人類学者は、性に関する言葉の意味を研究した。心理学者は、性格、ロマンティックな関係、社会的支援行動に関するデータを収集した。社会学者は、アルコールの消費、人種関係、時代評価を研究した。CAPS は、また、同一のサンプルから得られた異なるタイプのデータを、コンピュータを用いて統合することができる。例えば、学生たちは、写真と録音された演説を評定し、また、身体的な活動を要する課題を解決し、さらに、ホルモンの成分試験のために唾液を提供した。研究者は、これらのデータを統合し、それらの間の関連性を明らかにしたのである。IRSS は、機関誌として「社会科学」(Social Science) を出版しており、今までに収集されたデータのタイプをリストに掲載している。したがって、研究者は、自分が行おうとしているデータ収集のモデルをそこに求めて、それを参考にすればよい。

CAPS では、全てのデータが SAS データ・ファイルに変換されて研究所のデータ・ライブラリーに保存されるので、自分のデータを再分析したり、一層詳細な分析をしたり、自分や他者の実験を追試したり、媒介変数を変えて発展的追試をしたりすることが容易である。一個人についての多量の、多様なデータは、種々の二次的な分析のための貴重な資料源となる。

CAPS にも限界がある。すなわち、これは、UNC の学部学生以外の母集団を代表するサンプルの提供を意図していない。しかし、もしどうしても必要ならば、それを、容易に他の集団にまで拡大することができる。CAPS のサンプルから得られた結論は、他のサンプルからのそれら



と幾分違うかも知れないが、どの程度相違するかは、単に経験的な疑問でしかない。

CAPS は、学生がオンラインで行ったり、告げることのできるような、例えば、意見、知識、情報、能力、あるいは、経験のような事柄には有効である。2人以上の学生の間の対面的な、リアルタイムの相互作用を要求する研究には適していないが、CAPS は、他の型のコミュニケーションや集団行動を研究するために使うことができる。例えば、研究の最初に、研究者は、学生に次のように説明する。あなたは、ある研究機関に所属する専門的な応答者であり、ある部局に配属されている。そして、他の部局員とは、一週毎に、電子郵便によってコミュニケーションすることができる。多くの社会心理学的研究が用いる時間を限られた、ワンショットの集団と異なり、このような集団は、過去と未来を持っており、時間と共にそれがどのように発展していくかを跡づることができる。なお、CAPS で、実験を行うこともできる。例えば、学生を無作為に条件に割り当てて、真の実験を容易に行うことができる。測定の繰り返しがある、被験者内デザインを用いることにより、学生は、全ての条件を経験する。これによって、ある実験が別の実験の結果に悪影響を与える可能性が最少化される。

ところで、CAPS は、自由記述式の反応を取り扱うこともできる。すなわち、CAPS は、研究数からいうと例外的であるが、文章になっているデータの収集も容易である。そして、また、ある語の出現する頻度を数えるといったコンピュータ化された分析や、分析者のために反応文を特殊なフォーマットにプリントアウトするといったデータの呈示にも適している。したがって、この研究のように、人々が体験、あるいは見聞する向社会的行動の種々のタイプを、また、ある型の向社会的行動についての人々の考えを、さらには、その行動の動機となっていると人々が考えるものを収集する場合、CAPS は、大いに役立つのである。

### 3) 典型的な向社会的行動（援助行動）の収集

UNC の学部学生の母集団を代表する CAPS のサンプルの中の94名は、コンピュータの端末に提示された図1の質問に対して回答することを求められた。その結果、彼らは、自分自身が観察した、あるいは経験した（援助者としてや被援助者として）援助行動を合計857個（一人平均9.1個）挙げた。これらの行動群に対して類型化の分析手法を適用するために、内容分析を通じて、20~30個の典型的な援助行動に全体を整理することが試みられた。その際、日本における高木の研究（1982, 1987a）や諸外国の研究（Wispe, 1972; Gottlieb, 1978; Amato & Pearce, 1983など）が、行動を分類するための基準として、最終段階において、参考にされた。また、分類の過程では、パーソナル・コンピュータが活用された。すなわち、ホスト・コンピュータに自動的に記録されているサンプルの反応は、パーソナル・コンピュータでも処理できるように変形・変換され、データ・フロッピーに写し替えられて、パーソナル・コンピュータで分類処理されたのである。

1回目の内容分析では、857個の援助行動が、意味が似ていると思われるもの同士を集めると

いう手続きによって、42種類の行動にまとめられた。この操作を繰り返すことによって、3回目の内容分析では、それが35種類にまでまとめ上げられた。さらに、4回目の内容分析においては、前述のように従前の行動類型化研究の結果が参考にされて、それらの援助行動が体系的に整理された(表1)。それに加えて、ある程度の数のサンプル(10人以上)がその行動をリストア

---

.Q

In this unit, we are interested in learning about HELPING BEHAVIORS.

These are behaviors involving one person's helping or doing something nice for another. Please think about the helping behaviors which you have observed or experienced (either as helper or the one receiving help).

ON THE NEXT SCREEN we will ask you to list as many as possible of the helping behaviors you have observed or experienced. The following example shows how we'd like the short descriptions listed (ONE PER LINE).

When you have finished reading, press NEW-LINE to list your own examples.

1. Donating blood
2. Helping a friend move
3. Helping an older person carry packages
4. Giving directions to a lost person
5. Donating money to a charity
6. Turning in a key that someone lost
7. Lending money to my brother
8. Sharing my umbrella on a rainy day
9. Calling an ambulance upon discovering an accident

.GET PAUSE ( )

.Q

Please list as many helping behaviors as you can think of. These can be ways you have helped others, ways others have helped you, or helping behaviors you have observed, but not experienced personally.

LIST ONE PER LINE. YOU HAVE 15 LINES TO ANSWER. PRESS END WHEN FINISHED.

- 1.
- 2.
- 3.
- 4.
- 5.
- 6.
- 7.
- 8.
- 9.
- 10.
- 11.
- 12.
- 13.
- 14.
- 15.

---

図1 向社会的行動を収集するためのCAPSのステートメント

表1 収集された向社会的行動の予備的分類

---

Assistance

1. Helping someone to study or do homework (67)
13. Taking notes for or lending notes for someone (22)
27. Teaching someone something for free (9)
33. Helping someone with research paper (2)

Helping

2. Helping someone with chores (64)
3. Giving someone transportation (50)
17. Helping someone to carry something (18)
19. Helping someone move (17)
20. Cooking meals for someone (16)
29. Babysitting for someone (6)
30. Running errands for someone (5)
28. Walking with someone (6)

Giving

4. Giving something to someone in need (47)
18. Giving money or time to someone (17)

Lending

5. Lending money to someone (44)
6. Lending something to someone (38)

Donating

7. Donating blood or plasma (38)
9. Donating money or time to a charity (28)

Support

8. Listening to someone's problem (37)
14. Giving advice to someone who has a problem (21)
22. Cheering someone up or comforting them (13)

Volunteer

10. Volunteering for a service organization or fundraiser (26)
11. Taking care of or visiting an old or handicapped person (26)
26. Helping an old or handicapped person (8)

Kind behavior

12. Giving direction to a lost person (23)
23. Returning or turning in something lost (12)
24. Sharing an umbrella with someone (10)
25. Helping someone to pick up or look for something (10)
34. Giving change to someone (1)

Consideration

15. Holding the door for someone (19)
31. Being polite or courteous (5)
32. Praying for someone (3)

Relief in emergency

16. Helping an accident victim or injured person in an emergency (19)
21. Helping someone with car trouble (14)
35. Saving someone's life (1)

---

注 ( ) 内の数字は、その行動をリストアップした人の数を示す。また、文頭の数字は、その人数の大きい順に付した項目の番号を表わす。

アップしたことも行動選択の基準にされて、最終的に5回目の内容分析では、今回の類型化研究で用いられる典型的な援助行動として、25種類の行動（表2）が選定された。

#### 4) 向社会的行動の類型化

選定された25種類の典型的な向社会的行動から特定の2つの行動を選び出して対にし、CAPSの96名のサンプルにそれらが無作為の順序で提示して、対にされた2つの行動がどの程度類似していると思うかを「非常に類似している」から「全く類似していない」までの5段階で評定することが求められた（図2）。なお、評定を求められる対の数が300個と非常に多いので、評定の信頼性と評定者への負担を考慮して、96人の評定者と300個の評定対は、無作為に24人と75個に4等分され、さらに75個の対群は25対ずつの3下位群に分けられた。そして、ある群の評定者は、いずれかの群の75対を評定することが求められ、1回に25対を合計3回評定した。なお、4群の評定者は等質であると仮定して、評定を統合し、25×25の距離（非類似度）マトリックスを作成し、それに各種のクラスター分析法（群平均法、重心法、ノンパラメトリック確率密度推定法、

表2 米国における類型化研究で用いられた向社会的行動

- 
1. 誰かの勉強や宿題を手助けする
  2. 誰かの日々の雑用を手助けする
  3. 何処かまで誰かを車に乗せる
  4. 困っている誰かに何かを寄付する
  5. 誰かにお金を貸す
  6. 誰かに物を貸す
  7. 献血や臓器の提供をする
  8. 誰かの悩みや問題を聞いてあげる
  9. 慈善団体にお金や時間を寄付する
  10. 奉仕団体や基金の設立に志願する
  11. 老人や障害者の世話や、慰問をする
  12. 迷子になった誰かに道順を教える
  13. 誰かのためにノートをとったり貸す
  14. 問題を抱えている人に忠告を与える
  15. 誰かのためにドアを開けて、あるいは閉じないように持っていてあげる
  16. 事故の犠牲者や緊急事態で怪我をした誰かを援助する
  17. 誰かの荷物を持って運んであげる
  18. 誰かにお金や時間を無償で与える
  19. 誰かの引越しを手伝う
  20. 誰かのために食事を準備する
  21. 車のトラブルで困っている誰かを助ける
  22. 誰かを励ましたり慰める
  23. 拾得物を返還する
  24. 誰かに傘を貸して、あるいは差しかけてあげる
  25. 何かを拾っている、あるいは捜している誰かを助ける
- 

注 文頭の数字は、表1のそれに該当する。

最近隣法，2段階密度結合法，ワードの最小分散法）が適用された。

向社会的行動の類型構造は，男女で相違することが予想されるが（予備的分析では，幾分異なることが確認されている），評定者数が少ないので，ここでは，性差を考慮しない一般的な構造について，また，既知の日本人の構造と比較するために，さらに，経験的に広い範囲で良い結果を与えるとされている群平均法とワードの最小分散法による結果を報告する。

図3は，群平均法による分析の結果を示す樹状図である。クラスター分けの基準（距離）を0.8にすると，表3のように，向社会的行動は8クラスター（なお，類型の意味の明瞭性から，敢えて1つの行動で類型としているものもある）に分類されることになる。各クラスターは，次のように解釈し，命名された。

第1クラスターは，誰かの勉強や宿題を直接手助けするとか，そのために代わりにノートを採

HELPING 4-88

This unit, designed by Osamu Takagi, asks Rs to rate similarity of pairs of statements about prototypical helping behaviors. There are 25 such statements, resulting in 300 pairs. Each R rates 75 of the pairs, 25 each in HELPING 4, HELPING 5, and HELPING 6. The pairs are presented in random order to each R. The lower numbered statement of each pair is presented first.

-----  
 1                      2                      3                      4                      5  
 very                                                                                                          very  
 dissimilar                                                                                                          similar

.Q

This is the first of three units about the similarity of helping behaviors. You will be shown 25 pairs of actions and asked to rate how similar they are. If they are similar in some ways but not others, try to use an 'average' to determine your rating. We want your first reaction. Don't ponder too long over each item.

HELPING 5-88

.Q

This is the second of three units about the similarity of helping behaviors. You will be shown 25 pairs of actions and asked to rate how similar they are. If they are similar in some ways but not others, try to use an 'average' to determine your rating. We want your first reaction. Don't ponder too long over each item.

HELPING 6-88

.Q

This is the third of three units about the similarity of helping behaviors. You will be shown 25 pairs of actions and asked to rate how similar they are. If they are similar in some ways but not others, try to use an 'average' to determine your rating. We want your first reaction. Don't ponder too long over each item.

図2 対にされた向社会的行動の類似度評定を求める CAPS のステートメント

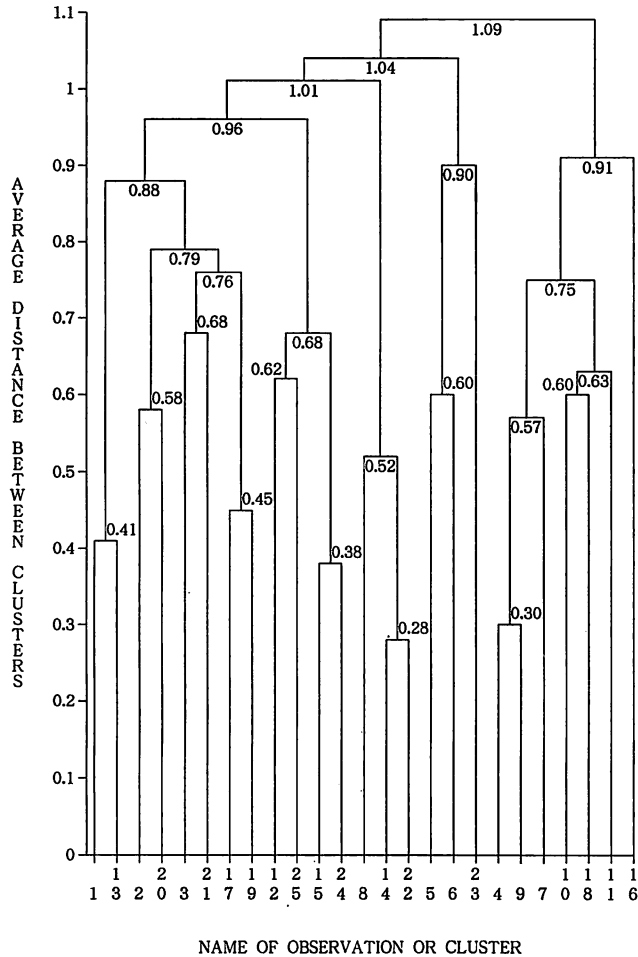


図3 群平均法により解明された向社会的行動のクラスター構造（樹状図）

ったりそれを貸したりするという、学生特有な勉学に関連した援助行動であり、「勉学に関連した援助行動」と命名された。第2クラスターは、基準距離が0.76で結合した2つの下位クラスターと1つの下位クラスターが0.79で結合するという構造になっている。その第1下位クラスターは、日々の食事の用意や掃除といったできたら避けたい嫌な雑事を誰かの代わりに自分がしてあげるといった思いやり行動を、第2下位クラスターは、車が無く、あるいは故障して困っている人をその人が希望するどこかまで乗せていってあげるといった奉仕的な行動を、そして第3下位クラスターは、かなりの労力を必要とする荷物や物の移動を手助けするといった行動を表している。そこで、これらの3つの下位クラスターを含む第2クラスターは、「労働奉仕的援助行動」と命名された。第3クラスターは、基準距離が0.68で結合する2つの下位クラスターから成って

表3 米国における向社会的行動の類型（群平均法）

<クラスター分け基準：クラスター間平均距離=0.8>

1. 勉学に関連した援助行動
  1. 誰かの勉強や宿題を手助けする
  13. 誰かのためにノートをとったり貸す
2. 労働奉仕的援助行動
  - 2-1. 嫌で厄介な雑事でのちょっとした手助け
    2. 誰かの日々の雑用を手助けする
    20. 誰かのために食事を準備する
  - 2-2. 自動車に関連した奉仕的行動
    3. 何処かまで誰かを車に乗せる
    21. 車のトラブルで困っている誰かを助ける
  - 2-3. 労力を必要とする援助行動
    17. 誰かの荷物を持って運んであげる
    19. 誰かの引越しを手伝う
3. 労力をあまり必要としない自発的な援助行動
  - 3-1. 何かを捜している人に対する援助行動
    12. 迷子になった誰かに道順を教える
    25. 何かを拾っている、あるいは捜している誰かを助ける
  - 3-2. 小さな親切行動
    15. 誰かのためにドアを開けて、あるいは閉じないように持っていてあげる
    24. 誰かに傘を貸して、あるいは差しかけてあげる
4. 精神的、心理的な援助行動
  - 4-1. 話や相談の相手になる思いやり行動
    8. 誰かの悩みや問題を聞いてあげる
  - 4-2. 忠告や励ましの援助行動
    14. 問題を抱えている人に忠告を与える
    22. 誰かを励ましたり慰める
5. 貸与的援助行動
  5. 誰かにお金を貸す
  6. 誰かに物を貸す
6. 物の返還に関する援助行動
  23. 拾得物を返還する
7. 寄付・提供、奉仕行動
  - 7-1. 寄付・提供行動
    4. 困っている誰かに何かを寄付する
    9. 慈善団体にお金や時間を寄付する
    7. 献血や臓器の提供をする
  - 7-2. 奉仕行動
    10. 奉仕団体や基金の設立に志願する
    18. 誰かにお金や時間を無償で与える
    11. 老人や障害者の世話や、慰問をする
8. 緊急事態における救助行動
  16. 事故の犠牲者や緊急事態で怪我をした誰かを援助する

いる。第1下位クラスターは、道に迷ったり、何かを落としてそれを捜している誰かを助けるといった行動から成っており、第2下位クラスターは、ちょっとした親切心から行われる日常的な援助行動から成っている。これらは、大した労力を必要としない、援助者の自発性に委ねられている行動を含んでおり、そこで、このクラスターは、「労力を必要としない自発的な援助行動」と命名された。第4クラスターは、基準距離が0.28で結合した下位クラスターと0.52で1つの行動が結合する構造を成し、問題を抱えて悩み苦しんでいる人の話を聞いたり、相談の相手になったり、あるいは彼らに忠告や励ましを与える行動を含んでおり、「精神的、心理的な援助行動」と命名された。第5クラスターは、お金や物をそれを必要としている誰かに貸すという行動を含んでおり、「貸与的援助行動」と命名された。第6クラスターは、類型化の基準（距離、0.80）を満たしていないのでクラスターと呼ぶべきでないかもしれないが、距離が0.90で結合する第5クラスターとは意味が幾分異なるので、敢えてクラスターとした。これは、拾得物をその所有者に返還するという行動から成り、「物の返還に関する援助行動」と命名された。なお、この2つのクラスターは、前述のように基準を緩めると、「物の貸与や返還に関する援助行動」にまとまる。第7クラスターは、2つの下位クラスターから成っている。第1下位クラスターは、距離が0.57で成立し、それが無くて困っている人にお金や物や時間を寄付する行動を含み、一方、0.63で結合した第2下位クラスターは、老人や障害者や困窮者のために、志願して、彼らの世話や慰問を行う奉仕行動を表している。そこで、これらの下位クラスターから成る第7クラスターは、「寄付・提供、奉仕行動」と命名された。最後の第8クラスターは、第6クラスターのように、単一の行動から成るが、0.91で結合する第7クラスターとは幾分意味が違うので、敢えて1つのクラスターとした。これは、事故の犠牲者や怪我人を救助する行動であり、「緊急事態における救助行動」と命名された。

つぎに、図4は、ワードの最小分散法による分析の結果を示す樹状図である。クラスター分けの基準（平方セミパーシャル相関）を0.04にすると、表4のように、向社会的行動は8つのクラスターに分類されることになる。そして、各クラスターは、以下のように解釈、命名された。

第1のクラスターは、群平均法の結果と同様に、勉強や宿題を直接手助けするとか、そのためにノートを探ったりそれを貸したりするという、勉強に関連した援助行動であり、「勉強に関連した援助行動」と命名された。第2のクラスターは、お金や物を貸すという行動であり、「貸与的援助行動」と命名された。この2つのクラスターは類型化基準を0.06にすると1つのクラスターにまとまり、必要としている人に自分のお金、物、ノートあるいは知識・知恵を貸して助けるという行動を表す。第3のクラスターは、基準を0.03にすれば分離する3つの下位クラスターから成っている。その第1下位クラスターは、日々の食事の用意や掃除といった嫌で厄介な雑事を代わりにしてあげるといった思いやり行動を、第2は、車が無く、あるいは故障して困っている人をどこかまで乗せていってあげるといった奉仕的な行動を、そして第3は、かなりの労力を必要とする荷物や物の移動を手助けするといった行動を表している。そこで、これらを含む第3ク



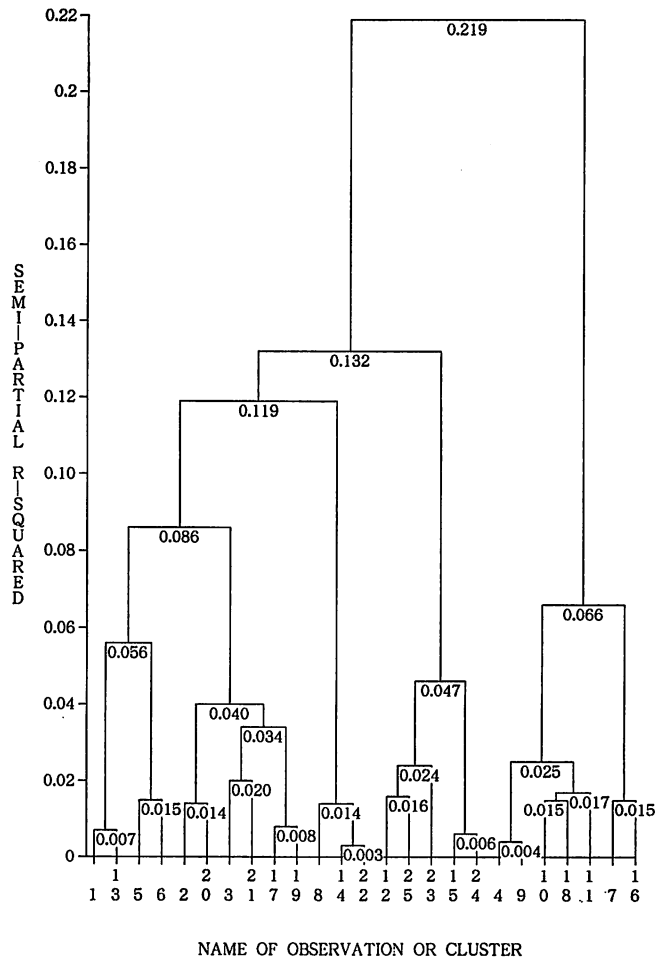


図4 ワードの最小分散法により解明された向社会的行動のクラスター構造（樹状図）

クラスターは、「労働奉仕的援助行動」と命名された。第4のクラスターは、問題を抱えて悩み苦しんでいる人の話や相談の相手になったり、彼らに忠告や励ましを与える行動を含んでおり、「精神的、心理的な援助行動」と命名された。第5のクラスターは、道に迷ったり、物を無くしたりして困っている人に対して、援助の手を差し伸べる行動を含んでおり、「遺失に関連する援助行動」と命名された。第6のクラスターは、ドアを開けてあげたり、閉じないように支えてあげるとか、傘が無くて困っている人に傘を貸したり差しかけるといった何気ない小さな親切心から起こる行動を含んでおり、「小さな親切行動」と命名された。この2つのクラスターは、基準を0.05にすると、1つのクラスターになり、日頃よく起こる、出費をほとんど含まない、親切心から自発的に行われる人助け行動を表す。第7のクラスターは、2つの下位クラスターから成

表4 米国における向社会的行動の類型（ワードの最小分類法）

---

<クラスター分け基準：semi-partial r-squared (SPRSQ)=0.04>

1. 勉学に関連した援助行動
    1. 誰かの勉強や宿題を手助けする
    13. 誰かのためにノートをとったり貸す
  2. 貸与的援助行動
    5. 誰かにお金を貸す
    6. 誰かに物を貸す
  3. 労働奉仕的援助行動
    - 3-1. 嫌で厄介な雑事でのちょっとした手助け
      2. 誰かの日々の雑用を手助けする
      20. 誰かのために食事を準備する
    - 3-2. 自動車に関連した奉仕的行動
      3. 何処かまで誰かを車に乗せる
      21. 車のトラブルで困っている誰かを助ける
    - 3-3. 労力を必要とする援助行動
      17. 誰かの荷物を持って運んであげる
      19. 誰かの引越しを手伝う
  4. 精神的、心理的な援助行動
    - 4-1. 話や相談の相手になる思いやり行動
      8. 誰かの悩みや問題を聞いてあげる
    - 4-2. 忠告や励ましの援助行動
      14. 問題を抱えている人に忠告を与える
      22. 誰かを励ましたり慰める
  5. 遺失に関連する援助行動
    - 5-1. 何かを捜している人に対する援助行動
      12. 迷子になった誰かに道順を教える
      25. 何かを拾っている、あるいは捜している誰かを助ける
    - 5-2. 拾得物に関連した援助行動
      23. 拾得物を返還する
  6. 小さな親切行動
    15. 誰かのためにドアを開けて、あるいは閉じないように持っていてあげる
    24. 誰かに傘を貸して、あるいは差しかけてあげる
  7. 寄付・提供、奉仕行動
    - 7-1. 寄付・提供行動
      4. 困っている誰かに何かを寄付する
      9. 慈善団体にお金や時間を寄付する
    - 7-2. 奉仕活動
      10. 奉仕団体や基金の設立に志願する
      18. 誰かにお金や時間を無償で与える
      11. 老人や障害者の世話や、慰問をする
  8. 病人や負傷者に対する援助行動
    7. 献血や臓器の提供をする
    16. 事故の犠牲者や緊急事態で怪我をした誰かを援助する
-

っている。第1下位クラスターは、それが無くて困っている人にお金や物や時間を寄付する行動を、第2は、老人や障害者や困窮者のために、志願して、彼らの世話や慰問を行う奉仕行動を表している。そこで、これらを含む第7クラスターは、「寄付・提供、奉仕行動」と命名された。第8のクラスターは、病気や怪我で苦しんでいる人に対する援助行動から成っており、「病人や負傷者に対する援助行動」と命名された。

群平均法とワードの最小分散法によるクラスター分析の結果を記述してきたが、両法による結果に大きな差異は存在しない。特に指摘するとすれば、遺失に関連する援助行動と小さな親切行動との組み合わせが両者で幾分違っていることである。類型化に無理の無い適切な分析結果を強いて選ぶならば、ワードの最小分散法による類型構造となろう。

### 5) 日本における向社会的行動の類型構造との比較

高木（1982, 1987a, 1987c, 1991）は、日本における向社会的行動の、種々の方法に基づく類型化研究の結果を報告しているが、米国における研究の結果と比較するために、クラスター分析の結果のみをまず最初に紹介する。

高木（1982）は、69名の男女大学生から収集した向社会的行動のエピソードを内容分析し、そこから22種類の典型的な向社会的行動を選定した（図5の行動欄参照）。つぎに、この22種類の中から特定の2種類の行動を選び出して対にし、合計231個の対を別の64名の男女大学生に提示し、その2つの行動がどの程度類似していると思うかを「非常に似ている」から「全く似ていない」までの5段階で評定することを求めた。そして、22×22の距離（非類似度）マトリックスを作成し、それにクラスター分析（平均法によるRモード）を適用した。その結果、図5のような樹状図が得られた。そこで、行動間の距離が2.5以内であるという基準で、以下のような7つのクラスターが確定された。

第1クラスター「寄付・奉仕行動」：自分のお金、時間、労力、あるいは血液や臓器などをそれを必要としている人に寄付、提供する行動

第2クラスター「分与・共有行動」：自分の持ち物をそれを必要としている人に貸し与えたり、共有する行動

第3クラスター「緊急事態における救助行動」：重大な緊急事態に陥って困っている人を直接救助したり、誰かに救助を依頼する行動

第4クラスター「努力を必要とする援助行動」：かなりの労力を必要とする仕事に協力する行動

第5クラスター「迷子や遺失者に対する援助行動」：道に迷ったり、物を失ったりして困っている人を援助する行動

第6クラスター「社会的弱者に対する援助行動」：身体の不自由な人、老人、あるいは幼い子供に対して援助の手を差し伸べる行動

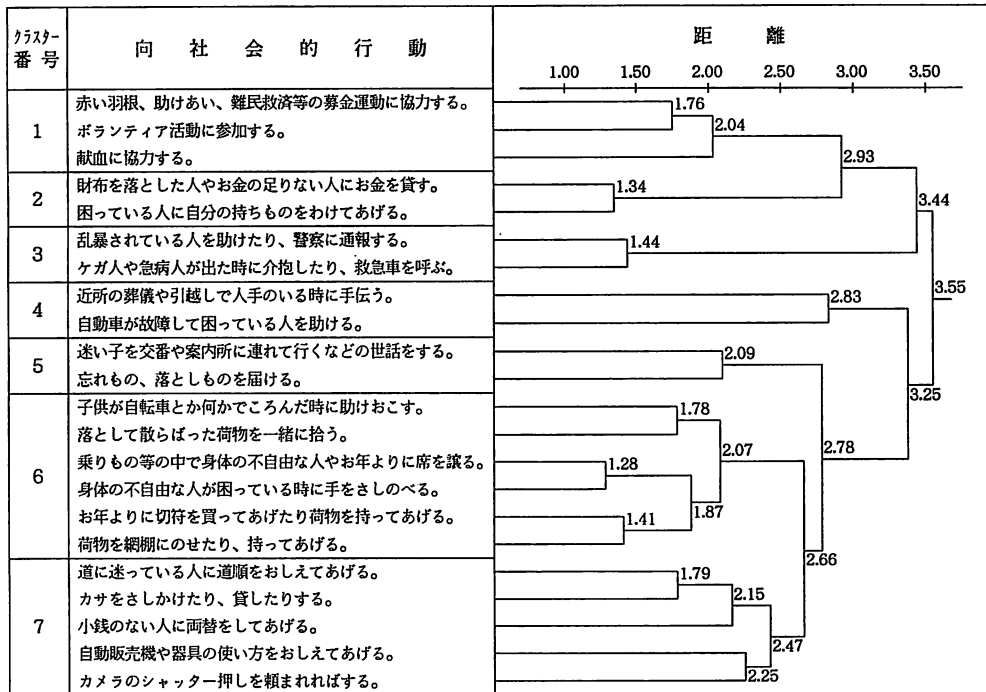


図5 平均法により解明された向社会的行動のクラスター構造（樹状図，高木 1982）

第7クラスター「小さな親切行動」：相手に対するちょっとした親切心から行うことのできる人助け行動

高木（1987a）は、10、20代の若者からだけでなく、10代から60代までの196（男性77，女性119）名の対象者（平均年齢31歳）から延べ899個の向社会的行動を収集し、内容分析を繰り返してそれを典型的な41種類の行動にまとめた（図6の行動欄参照）。そして、この行動を用いて、先行研究（高木，1982）と同様の方法論で、行動のクラスター分析を行った。行動対の数が820個と非常に多いので、その行動と評定者（1，2年次の学部男女学生，400名）を無作為に4等分し、100名の学生が205対を5段階で評定するようにした。4群の学生が等質であると仮定し、評定を統合して、100名の学生が820対全てを評定したものとして、41×41の距離（非類似性）マトリックスに平均法によるRモードのクラスター分析法を適用した。その結果（図6），行動間の類似度3.25を基準として、以下の9つのクラスターが得られた。

第1クラスター「寄付・提供行動」：それを必要としている人にお金や物資を寄付したり，あるいはその人のために時間，労力などを提供する行動

第2クラスター「奉仕行動」：身体の不自由な人や老人を介護・介助したり慰問する，あるいはそのための準備をする奉仕的行動

第3クラスター「臓器の提供行動」：自己の臓器や血液をそれを必要としている人に提供する

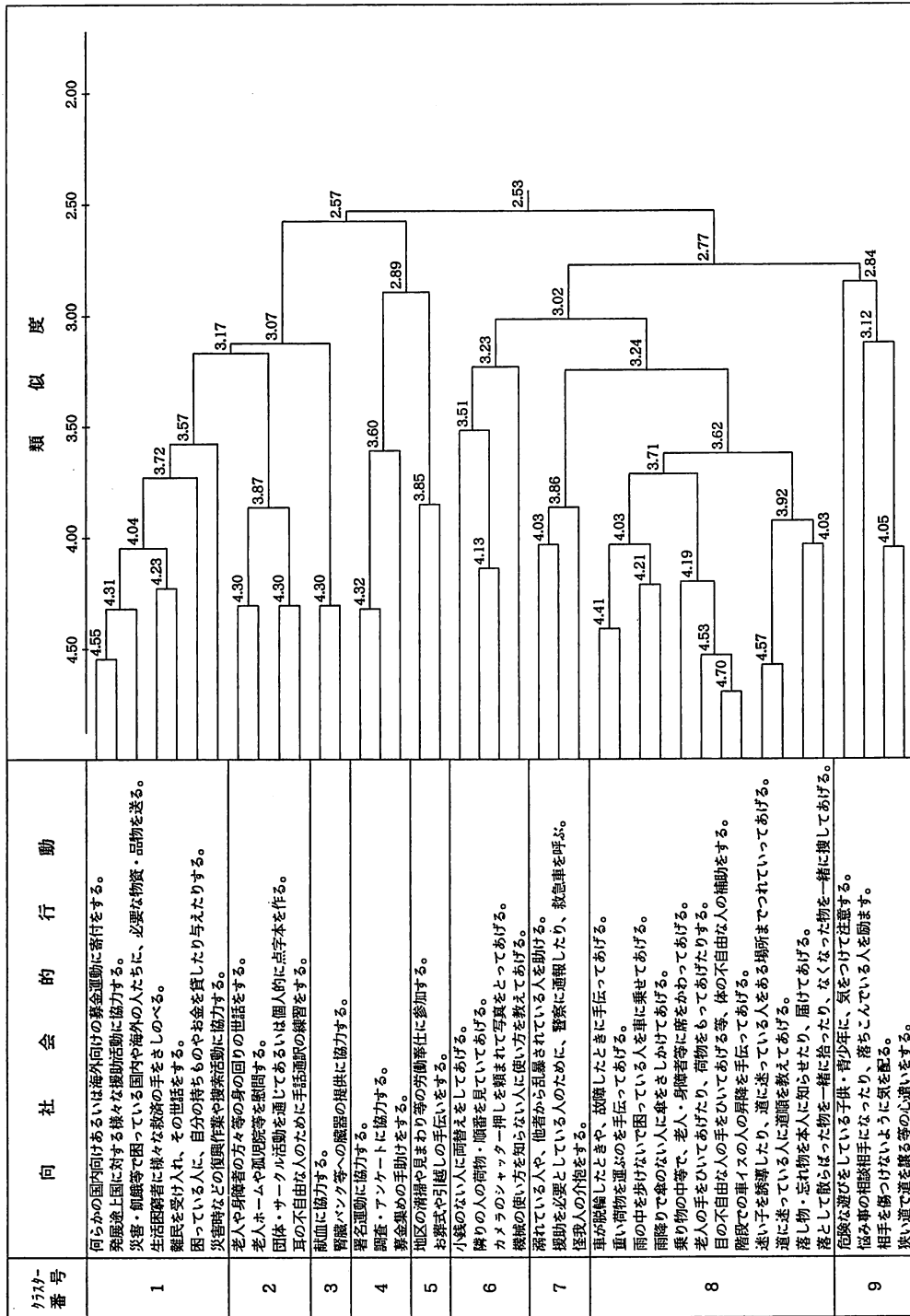


図 6 平均法により解明された向社会的行動のクラスター構造 (樹状図, 高木 1987a)

## 行動

第4クラスター「組織的、計画的な活動に対する協力要請への応諾行動」：組織的に計画された署名や募金運動、あるいは調査活動などへの協力要請に応諾する行動

第5クラスター「身体的努力を必要とする行動への自発的協力」：労働奉仕など、かなりの労力を必要とする行動に自発的に協力する行動

第6クラスター「小さな親切行動」：出費の少ない、相手に対するちょっとした親切心から行うことのできる人助け行動

第7クラスター「緊急事態における救助行動」：重大な緊急事態に陥っている人を直接救助したり、誰かに救助を依頼する行動

第8クラスター「非組織的、非計画的な援助必要事態への自発的介入行動」：組織的に計画されたものではなく、日常の生活場面で困っている人に気づき自発的に援助の手を差し伸べる行動

第9クラスター「精神的、心理的な援助行動」：相手のことを心配し、気を配り、心遣いを示す思いやり行動

さて、日本における向社会的行動のクラスター分析の結果を記述してきたが、日常的な向社会的行動の収集における網羅性とクラスターの性格の明瞭性とから判断して、9つのクラスターから成る向社会的行動の類型構造（高木，1987a）を日本のその代表的な構造として選び、米国における類型構造（ワードによる最小分散法の結果）とそれとを比較することによって、日米間の差異を検討することにする。

クラスターを構成する典型的な向社会的行動それ自身が両国間で幾分違うので、クラスターの対応関係を厳密に確認することはできないが、両国間に類似するクラスターが幾らか認められる。例えば、思いやりを示す「精神的、心理的な援助行動」、出費を覚悟することなく親切心から行える「小さな親切行動」、お金、物資、あるいは時間や労力の「寄付・提供行動」などは、いずれの国の類型構造においてもクラスターを構成している。

しかしもう一方では、クラスターの分離・独立や統合・合併による類型構造の差異が両国間で認められる。奉仕団体などの活動に志願して介護や慰問などをする「奉仕行動」は、日本においては独立したクラスターを成しているが、米国においては、「寄付・提供行動」と共に1つのクラスターを構成している。ところが、逆に、お金や物資を誰かに貸与する「貸与的援助行動」は、米国では1つのクラスターを成しているが、日本においては「寄付・提供行動」の中に含まれている。これに関連して、日本における「組織的、計画的な活動に対する協力要請への応諾行動」は、米国における奉仕行動の下位クラスターに部分的に対応している。さて、米国における「病人や負傷者に対する援助行動」は、日本における「臓器の提供行動」と「緊急事態における救助行動」とを統合したものである。さらに、米国における「遺失に関連する援助行動」は、日本における「非組織的、非計画的な援助必要事態への自発的な介入行動」の下位クラスターとな

っている。また、米国における「労働奉仕的援助行動」は、労力を必要とする援助行動を下位クラスターにしており、それが日本における「身体的努力を必要とする行動への自発的協力」に対応している。嫌で厄介な日々の雑事でのちょっとした手助けと自動車に関連した奉仕的行動もまた下位クラスターになっており、これは「非組織的、非計画的な援助必要事態への自発的介入」の一部と対応している。

ところで、文化、あるいは調査対象者に特有なクラスターと考えられるものも認められる。ほとんど毎日のようにたくさんの宿題を課せられる特に米国の学生にとって、予習や課題提出は、しばしば他者の援助を必要とする事態を引き起こす。したがって、この研究のような対象者の場合、「勉学に関連する援助行動」は、独立した重要なクラスターとなっているのだろう。

以上のように、一致すると考えられるクラスターも幾らか認められるが、基本的構造において異なるほどではないにしても、クラスターとしての独立や下位クラスターによるクラスターの構成の点で両国間に幾らかの差異が存在するようである。このような類型構造における文化差は、一体何によるのであろうか。

#### 4. 比較文化的関心から今後期待される向社会的行動の分類学的研究

日本における向社会的行動の類型構造と幾分異なる構造が米国における同様の研究から明らかにされたが、これらの違いは、向社会的行動に関する、日本人と異なる米国人のどのような意識、知識、価値観などに由来するのであろうか。

高木は、日本における向社会的行動の一連の分類学的研究（1982, 1983, 1984, 1987a, 1987b, 1987c, 1991）によって、日本人のそれらを3つの視点から明らかにしている。すなわち、まず第1の視点は、向社会的行動それ自身の特性認識である。各行動は、それぞれ独特の特性を持っており、その特性の認識は、各個人が日常生活の中で直接、あるいは間接に経験したことに影響されている。そこで、多くの行動特性に共通する一層一般的な特性を究明し、その基本特性を、各個人が特定の向社会的行動、および行動類型にどの程度認めるかを検討した。つぎに第2の視点は、行動を指示する規範の認識である。人は、社会化の過程を通じて、他者からの行動期待をその内容とする社会的規範と、それを基盤に個人的経験によって修正され内面化された個人的規範を獲得している。これらの規範は、それに関連する行動の実行を各個人に指示する。そこで、向社会的行動に関する規範的態度や意見に共通する一層一般的な規範を究明し、それらの規範によって、各個人が特定の向社会的行動、および行動類型の実行をどの程度指示されているか考えるかを検討した。最後に第3の視点は、行動生起を規定する動機である。行動は、規範の指示も含めて、種々の動機、原因、理由のもとで生起している。それらが行動生起を規定しようとするのは、自己自身の経験、あるいは他者の行動に関する知識があるからである。そこで、行動の生起、あるいは非生起に関連すると思われる要因に共通する一層一般的な動機を究明し、それらの

動機によって、特定の向社会的行動、および類型行動の生起、非生起が規定されると各個人がどの程度考えるかを検討した。そして、これらの一連の多様な検討によって、個別の向社会的行動、およびその類型行動の特徴が明らかにされた。

米国における個別の向社会的行動、およびその類型行動も、同様の多面的な検討によってそれらの性格が、また日本におけるそれとの違いも明らかになるだろう。これらの研究のデータは目下分析中であり、その結果は、今後順次報告する予定である。

#### 参 考 文 献

- Alexander, R. D. (1979) Evolution and culture. In Chagnon, N. A. & Irons, W. (Eds.) *Evolutionary biology and human social behavior : an anthropological perspective*. N. Scituate, Mass. : Duxbury Press.
- Amato, P. R. & Pearce, P. (1983) A cognitively-based taxonomy of helping. In Smithson, M., Amato, P. R. & Pearce, P. *Dimensions of helping behaviour*. Oxford : Pergamon Press.
- Campbell, D. T. (1978) On the genetics of altruism and the counterhedonic components in human culture. In Wispé, L. (Ed.) *Altruism, sympathy, and helping*. New York : Academic Press.
- Campbell, D. T. (1983) The two distinct routes beyond kin selection to ultrasociality : implications for the humanities and social science. In Bridgeman, D. L. (Ed.) *The nature of prosocial behavior*. New York : Academic Press.
- Cloak, F. T. Jr. (1977) Comment on "The adaptive significance of cultural behavior." *Human Ecology*, 5, 49-52.
- Durham, W. H. (1979) Toward a coevolutionary theory of biology and culture. In Chagnon, N. A. & Irons, W. (Eds.) *Evolutionary biology and human social behavior : an anthropological perspective*. N. Scituate, Mass. : Duxbury Press.
- Gottlieb, B. J. (1978) The development and application of a classification scheme of informal helping behaviors. *Canadian Journal of Behavioral Science*, 10, 105-115.
- Gouldner, A. W. (1960) The norm of reciprocity : a preliminary statement. *American Sociological Review*, 25, 161-179.
- Homans, G. C. (1961) *Social behavior : its elementary forms*. New York : Harcourt, Brace & World.
- Pearce, P., Amato, P. R. & Smithson, M. (1983) Introduction and plan of the book. In Smithson, M., Amato, P. R. & Pearce, P. *Dimensions of helping behaviour*. Oxford : Pergamon Press.
- Staub, E. (1979) *Positive social behavior and morality* (Vol. 2). New York : Academic Press.
- 高木 修 (1982) 順社会的行動のクラスターと行動特性 年報社会心理学 第23号 135-156.
- 高木 修 (1983) 順社会的行動の動機の構造 年報社会心理学 第24号 187-207.
- 高木 修・竹村和久 (1984) 援助動機と非援助動機の関係 関西大学社会学部紀要 第16巻 第1号 51-65.
- 高木 修 (1987a) 順社会的行動の分類 関西大学社会学部紀要 第18巻 第2号 67-114.
- 高木 修 (1987b) 非援助動機の構造とそれに基づく非援助行動の特徴づけ 関西大学社会学部紀要 第19巻 第1号 27-49.
- 高木 修 (1987c) 援助行動の類型と特性 中村陽吉・高木修共編著 『「他者を助ける行動」の心理学』 光生館 14-33.
- 高木 修 (1991) 援助行動—その分類学的研究— 三隅二不二・木下富雄編『現代社会心理学の発展Ⅱ』 ナカニシヤ出版 123-151.



米国における向社会的行動の分類学的研究（高木）

Walster, E., Walster, G. W. & Berscheid, E. (1978) *Equity: theory and research*. Boston : Allyn and Bacon.

Wispé, L. G (1972) Positive forms of social behavior : An overview. *Journal of Social Issues*, 28, 1-20.